

2017年度入試 直前動向分析

大学入試センター試験まで残り1ヶ月半となり、今年も本格的な入試シーズンを迎えた。

国立大では2016年度に続き学部・学科の再編が活発になっているほか、文系学部から理系学部へ入学定員をシフトする動きがみられる。私立大では国際系・医療系を中心とした学部・学科の新増設に加え、大規模大での定員超過抑制の動き、例年以上に多い入学定員増など、合格者数への影響が注目される。

こういった環境で行われる2017年度入試。ここでは、10月に実施した第3回全統マーク模試の志望データをもとに2017年度入試の動向を探る。

国公立大学編

◆センター試験出願状況

大学入試センターは10月7日に2017年度大学入試センター試験（以下、「センター試験」）の出願状況を公表した。受付最終日時点の出願総数は540,359人であった。内訳をみると、現役生が6,480人増の452,961人（前年比102%）、既卒生等が1,639人増の87,398人（同102%）と、いずれもわずかながら増加している。

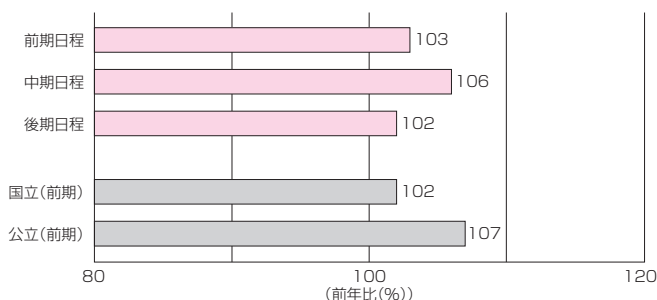
18歳人口増加に伴い2017年度の現役大学志願者数は微増の見込みであることから、最終的な出願者数もやや増の約56万人になるものと予想する。センター試験の確定志願者数は12月上旬に発表される予定である。

◆国公立大の人気の大きな変化はなし

ここからは第3回全統マーク模試の志望データをもとに、国公立大の志望動向をみていこう。

入試の中心となる前期日程の志望者数は前年比103%と、模試受験者前年比104%とほぼ同様の増加率となっており、国公立大の人気の大きな変化はない【図表1】。国立大と公立大を比較すると、国立大の前年比102%に対し、公立大では同107%と、公立大での増加率が高い。増加率の高い大学には高崎経済大（111%）、首都大学東京（116%）、高知工科大（117%）、北九州市立大（113%）などが挙がる。センター試験の科目数が比較的少ない学部・学科で伸びが大きい。

【図表1】国公立大 志望動向（第3回全統マーク模試より）



◆難関大の志望動向

難関10大学の前期日程の志望者前年比は104%で、国公立大全体と大きな差はない。【図表2】は難関10大学の志望者前年比を系統別に表したものである。

東京大は前年並みの志望者数となっている。文科類では、文科一類（前年比96%）、文科二類（同102%）、文科三類（同108%）と、現時点では2016年度入試同様の動向となっている。理科類では、2016年度入試で志願者が増加した理科三類で前年比100%と引き続き人気を維持している。

2017年度に工学部の改組と情報学部の新設を予定している名古屋大は志望者前年比102%となった。工学部は5学科を廃止し、7学科に改組する。学部全体の前期日程募集人員は52名減少するものの、志望者は前年比97%と募集人員の減少率（92%）ほど減ってはいない。一方、情報学部は情報文化学部を発展的改組し、3学科構成となる。前期日程の募集人員が54名増加する影響もあり、志望者数は前年比181%と大きく増加している。既存の学科でも志願者が増加しており、人気となっている。

京都大は大学全体の志望者は前年比103%となっている。学部別にみると、2016年度入試と同様、文高理低が継続している。文系では教育学部が志望者前年比142%、経済学部が同112%と人気が高い。理系では医学部人間健康科学科の志望者が前年比122%と増加が目立つ。人間健康科学科は、2017年度入試ではこれまでの専攻別募集から学科一括募集となるほか、入学定員削減に伴い一般選抜の募集人員が大きく減少するため注意が必要だ。

大阪大は世界適塾入試の導入に伴い、全学部で後期日程を廃止する。これにより周辺大では後期日程の志願者増加が見込まれる。なかでも地元の神戸大や大阪市立大では後期日程の志望者が上位層を中心に大きく増加しており、厳しい入試が予想される。

その神戸大は国際文化学部と発達科学部を改組して、国際人間科学部を新設する。学部全体の募集人員は2割近く減少するものの、志望者は前年比105%と増加している。

【図表2】国立難関10大学 系統別志望動向（第3回全統マーク模試より）

	北海道	東北	東京	東京工業	一橋	名古屋	京都	大阪	神戸	九州	
	100	103	100	105	101	102	103	107	111	103	
文 106	114	97	108			96	104	114	111	105	
教育 101	101	116				110	142			107	
外国語 102								102			
法 104	107	96	96		101	108	106	116	103	108	
経済 111	104	126	102		100	107	112	124	109	123	
経営・商 120					101				134		
理 103		107		98		100	99	105	115	103	
工 102		102	98	106		97	98	99	117	99	
農 98		108	101			93	96		基礎工 114	海事科学 125	芸術工 88
	水産 96										
	獣医 92										
医 100	94	94	100			95	102	99	104	125	
歯 95	79	97						98		110	
薬 110		107					109	114		106	
保健 103	101	83				99	122	103	125	95	
学際・他 106	総合文系 122				社会 101	情報 181	総合人間 101	人間科学 109	国際人間 105		
	総合理系 97										

※表中の数値は前期日程の志望者前年比（%）、保健は医学部のうち医学科以外の学科
 ※東京大：文→文科三類、法→文科一類、経済→文科二類、工→理科一類、農→理科二類、医→理科三類 東京工業大：理→第1類、工→第2～7類

◆2017年度も活発な学部・学科再編の動き

国立大では2017年度入試も学部・学科再編の動きが活発だ。教育学部ではここ数年「総合科学課程」の廃止・縮小が進み、「教員養成課程」への定員シフトが続いている。2017年度も6大学で総合科学課程が廃止され、総合科学課程の入学定員は3年前と比較すると4割程度にまで減少する。総合科学課程廃止が相次ぐなか、愛知教育大と大阪教育大の2大学では、総合科学課程を再編し、教員をサポートする人材を養成する新しい課程・学科を設置する。大阪教育大では再編により、総合科学課程の募集人員が減っているが、志望者は前年比103%と増加しており、人気となっている。

2017年度入試は理系学部を中心に学科の大括り化を行い、コース制やプログラム制を導入するケースが目立つ。千葉大工学部は10学科を1学科9コースに、新潟大工学部は7学科を1学科9プログラムにそれぞれ再編する。コース制やプログラム制を導入することで、定員管理が厳格な「学科」より学生の希望や社会の要請等に応じた人数調整を行いやすくなる。また、学科を集約することで学科内に多くの教員が携わることになるため、分野を横断した教育をしやすくなる。こういったメリットが学科を大括り化する背景にある。

活発な学部・学科再編の動きにより、新しい学部が誕生しているが、志望動向はさまざまである。前述の名古屋大、神戸大の新設学部は志望者が集まり人気となっているが、なかには現時点で志望者が集まっていない新設学部もみられる。滋賀大のデータサイエンス学部は、経済学部の情報管理学科を募集停止して新設される。募集人員60名に対し、今模試の志望者は61人となっている。既存の経済学部では募集人員150名に対し、志望者は637人となっており、差は歴然としている。

◆文高理低の傾向は継続 社会科学系の人気が鮮明に

最後に学部系統別の志望動向について、前期日程の状況を中心にみていこう【図表3】。全体的な傾向は2016年度入試と同様、

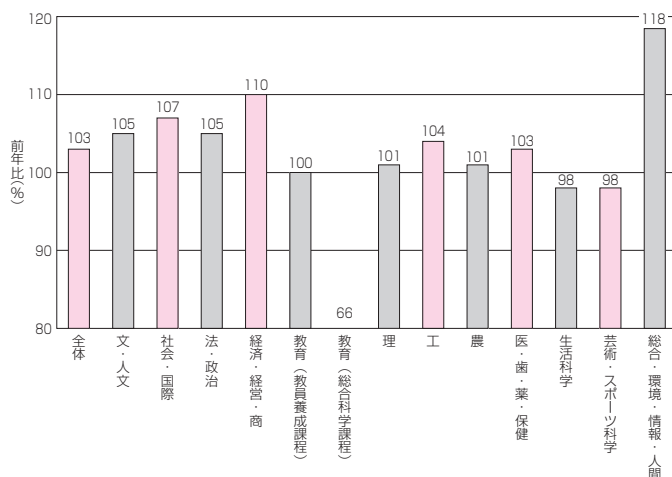
「文高理低」である。

文系は教育を除く各系統で志望者が増加しており、なかでも経済・経営・商学系では志望者が1割以上増加している。「経営」113%、「商・会計・他」127%で増加率が高く人気となっている。また、社会・国際学系の「国際関係」114%、法・政治学系の「政治・行政」116%も人気が過熱している。一方、教育系では「総合科学課程」での志望者減少が目立つ。ただし、2017年度入試も続く総合科学課程廃止・縮小により、募集人員自体も前年比64%と減少しているため、各大学ではこれほどの減少とはしていない。

理系では、理学系、農学系は前年比101%と微増にとどまり、模試受験者の増加率104%と比較すると高くはない。とくに「化学」「生物」は志望者が減少しており、不人気となっている。一方、工学系は前年比104%と、それほど人気は落ち込んでいないが、分野によって差がある。「通信・情報」「建築」は志望者が1割以上増加している。一方、「応用化学」は前年比92%と志望者が大きく減少している。

医療系では、「薬」「看護」の志望者前年比はそれぞれ104%、103%と増加しているのに対し、「歯」は前年並みとなっている。また、2016年度入試で志願者を減らした「医」は前年比102%と反動はみられない。

【図表3】国公立大（前期）学部系統別志望動向（第3回全統マーク模試より）



私立大学編

◆私立大の受験環境

私立大も第3回全統マーク模試の志望データをもとに動向をみていくが、まずは私立大に関連する2017年度入試の環境について触れておきたい。

2017年度も学部・学科設置の動きは盛んで、本誌10月号でも取り上げたとおり、医療系、国際系での新設が目立つ。なかでも看護分野では12大学で学部・学科が設置される予定である。また、医学部では2年連続の学部新設となる。

このほか注意したいのは、入学定員と合格者数の変動だ。2016年度より、定員規模の大きい私立大に対して補助金不交付になる入学定員超過率が厳格化されている。このため、2016年度入試では各地で合格者の絞り込みがみられた。このルールは段階的に厳しくなることから、2017年度は今春以上に慎重に合格者数を出す大学が出ると予想される。一方で、国の定員超過抑制強化に対抗する形で、2017年度は入学定員増を申請した大学が例年以上に多く、62大学で計9,412名の増員が予定されている。入学定員が増えた大学・学部では合格者数は増加する。この2つの動きで来春の合格者数は非常に読みづらい状況となっている。

英語外部試験の入試への利用は国私問わず拡大しているが、私立大では一般入試のアラカルト方式の一つとして利用する大学が多い。2017年度は学習院大(国際社会科学)、早稲田大(文、文化構想)などが、英語外部試験を利用する入試方式を導入する。受験生の動向としては、これらの方式を積極的に活用する動きはまだ鈍く、従来からの方式に比べ、志望者は少ない大学が目立つ。

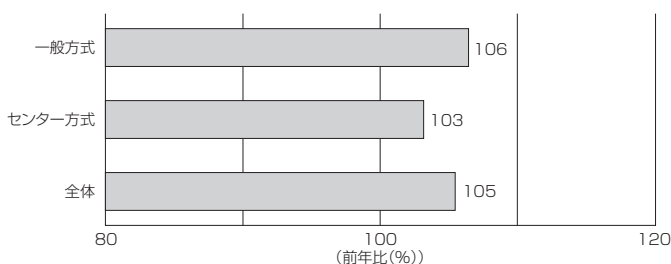
◆主要大学の志望動向

第3回全統マーク模試における私立大の志望者は前年比105%と増加した【図表4】。模試受験者の前年比104%をわずかながら上回っている。方式別にみると、一般方式で前年比106%、センター方式で同103%と、一般方式で増加率が高く、センター方式より一般方式での受験を考える受験生の動向をうかがわせる。

【図表5】は各地区の主要大学の志望動向を大学グループごとにまとめたものである。

首都圏の「早慶上理」では志望者前年比108%と増加、なかでも早稲田大の増加率が113%と最も高くなっている。2016年度入試では9年ぶりの志願者増となったが、その人気は2017年度入試も継続しそうである。学部別では、文化構想(前年比126%)、

【図表4】私立大 志望動向(第3回全統マーク模試より)



社会科学(117%)、商(116%)などで志望者の増加率が高い。慶應義塾大では大学全体の志望者は前年比103%となっている。文理別でみると、文系で志望者増加、理系で減少しており、文高高低がはっきりしている。上智大では前年比109%と志望者が増加しているが、TEAP利用型では志望者が減少している。これは全学部・学科でTEAPの4技能が必要となるため、2技能から4技能に変更する学科の志望者は、全体で前年の7割程度まで落ち込んでいる。

「MARCH」でも前年比108%と志望者が増加している。とくに法政大は2016年度入試で大きく志願者が増加したが、今模試でも前年比116%と人気が続いている。

グループ各大学で英語外部試験利用型の拡大がみられるが、既存の方式に比べ志望者は少ない状況だ。なお、来春は青山学院大、中央大、立教大で大規模な入学定員の増員が予定されている。

「日東駒専」では、国際観光、国際、情報連携の3学部を新設する東洋大で前年比112%と志望者が増加している。また、文系学部のみで構成される専修大も志望者前年比110%と増加率が高くなっており、文系人気が顕著である。

「関関同立」に目を移すと、同志社大、関西大、関西学院大では1割以上の増加となっている。4大学とも文系での増加率が高くなっている。とくに、社会科学系で志望者が増加しており、なかでも経済、経営、商学部ではいずれの大学も志望者が1割以上増加、人気となっている。関関同立では、立命館大で入学定員を増員する予定である。

「産近甲龍」では現代社会学部を新設する京都産業大で前年比117%と志望者が集まっている。他の3大学も含め、このグルー

【図表5】主要私立大 文理別志望動向(第3回全統マーク模試より)

大学	前年比		
	文系	理系	合計
早慶上理	112%	101%	108%
早稲田	114%	106%	113%
慶應義塾	106%	97%	103%
上智	111%	98%	109%
東京理科	98%	100%	100%
MARCH	110%	100%	108%
明治	109%	103%	107%
青山学院	106%	98%	105%
立教	111%	94%	109%
中央	103%	92%	100%
法政	120%	105%	116%
日東駒専	110%	98%	107%
日本	106%	100%	103%
東洋	116%	95%	112%
駒澤	107%	96%	107%
専修	110%	-	110%
関関同立	112%	103%	109%
関西	113%	103%	111%
関西学院	113%	105%	112%
同志社	114%	104%	111%
立命館	107%	102%	106%
産近甲龍	112%	101%	108%
京都産業	123%	97%	117%
近畿	114%	101%	108%
甲南	115%	110%	114%
龍谷	104%	97%	102%

※芸術・スポーツ系、総合・環境・情報・人間系は文系に含めて集計

プも文高理低が顕著だ。近畿大では入学定員が920名の大幅増員となる。

◆学部・学科新設等の動き

続いて2017年度に開設される学部・学科の動きについてみていこう。

医療系では**国際医療福祉大**に医学部が新設される。今春の東北医科薬科大に続き、2年連続の医学部新設となる。国際医療福祉大の志望者は、近隣医学科に比べて決して多く集まっている状況ではない。ただし、併願予定大は国公立大では筑波大、千葉大など、私立大では順天堂大、昭和大、東京医科大など難関校が上位に挙がる。

なお、医学科では2017年度も、地域で医療活動を担う医師を確保するための地域枠による定員増がある。詳細はp10の「2017年度医学科増員予定大学一覧」で確認してほしいが、私立では4大学で16名の増員となる。

看護学部・学科の新設は、**岩手医科大**、**秀明大**、**福井医療大**、**一宮研伸大**、**兵庫大**、**福岡看護大**など12校である。このうち福井医療大、一宮研伸大は短大からの転換であり、看護系短大の4大化が一層進む。

国際系学部の新設も目立つが、なかでも**東洋大**（国際観光、国際）、**南山大**（国際教養）などが注目される。東洋大では国際地域学部を再編し、国際観光、国際の2学部を設置する。志望者の併願予定先は、国際観光学部では立教大（観光）、東海大（観光）など、国際学部では明治学院大（国際）、法政大（国際文化）などが挙がっている。受験生が両学部の特徴を把握したうえで、志望学部を決めている様子が見える。南山大（国際教養）の併願予定先は、国公立大では愛知県立大（外国語）、名古屋市立大（人文社会）、私立大では同じ南山大の外国語学部、愛知大（国際コミュニケーション）などが挙がっている。

津田塾大では総合政策学部が新設される。学芸学部に加え入学定員の規模は小さいものの、すでに他学科に負けない志望者数を集めている。併願予定先は東京女子大（現代教養）、津田塾大（学芸）、早稲田大（文化構想）などが挙がっている。

本誌10月号でも取り上げたが、近年都市部の大学でキャンパス移転・再配置の動きが盛んである。**【図表6】**は2017年度にキャンパス移転・設置をする大学のうち主なものを挙げている。学部の新設・改組のタイミングで移転・設置する動きもみられる。模試における志望者前年比をみると、大妻女子大（社会情報）（198%）、東京電機大（システムデザイン工）（260%）など、前

【図表6】 主なキャンパス移転・設置大と志望動向（第3回全統マーク模試より）

大学（学部）	変更点	志望者前年比
大妻女子（社会情報）	1・2年次：多摩、3・4年次：千代田（2016入学生） →4年間千代田キャンパス	198%
津田塾（総合政策）	千駄ヶ谷キャンパス（東京都渋谷区）に新校舎開設	-
東京電機（システムデザイン工）	千葉ニュータウンキャンパス →東京千住キャンパス ※2017年度情報環境学部より改組	260%
東洋（情報連携）	赤羽台キャンパス（東京都北区）を開設	-
南山（総合政策）	1年次：瀬戸、2～4年次：名古屋（2016入学生） →4年間名古屋キャンパス	105%
名城（人間）	1年次：天白、2～4年次：ナゴヤドーム前（2016入学生） →4年間ナゴヤドーム前キャンパス	115%
（都市情報）	1年次：可児（岐阜県）、2～4年次：ナゴヤドーム前（2016入学生） →4年間ナゴヤドーム前キャンパス	134%
京都美術工芸（工芸）	京都東山キャンパスを開設	153%
大阪工業（ロボティクス&デザイン工）	梅田キャンパスを開設	116%

年から志望者が大きく増加している大学が目立つ。大学の意図通り、利便性の向上が人気上昇につながっている。

◆文高理低—社会科学系が人気、理学系不人気

最後に学部系統別の志望動向について確認する**【図表7】**。主要大でみられた「文高理低」は、私立大全体でも顕著だ。私立大全体の志望者前年比105%と比較すると、文系ではそれ以上の増加率となっている系統が多い。なかでもとくに高い人気を示しているのは、社会科学系の社会・国際学系、経済・経営・商学系などである。各分野の志望者前年比は「社会」115%、「経済」111%、「経営」112%、「商・会計・他」112%と人気は過熱気味だ。

一方、理系では理学系の志望者が前年比95%と、全系統中最も減少率が高いほか、農学系も前年並みにとどまっており、人気は低調である。工学系は前年比104%と志望者は増加しているものの、文系各系統と比較すれば、落ち着いた動きとなっている。工学系では国公立大同様、分野により人気差が出ている。「通信・情報」「建築」では志望者が前年から1割増加している一方、「応用化学」では前年比94%と減少している。

医・歯・薬・保健学系の志望者前年比は、「医」106%、「歯」97%、「薬」98%、「看護」105%などとなっている。「薬」は国公立大では志望者が増加しているが、私立大では減少しており、対照的な動向となっている。医学科で前年比が高くなっているが、来春新設される国際医療福祉大（医）を除くと103%となる。医学科人気は落ち着いているとみてよieldろう。同じく看護も学部・学科の新設が志望者増の追い風となっており、既存の学部・学科だけで比較すれば、前年比102%と落ち着いている。多くの学部・学科が設置されることで、志望者は分散しそうだ。

2017年度は、国公立大では活発な学部・学科の新設・改組の影響から、当該学部・学科だけでなく周辺大も含め、過去の動向からの予測が立てにくい状況である。私立大では受験料割引拡大等の影響で1人当たりの出願数はさらに増加しそうである。また、最大の懸念は、やはり合格者数の増減が予測しにくい点だろう。出願時期、結果判明期には、例年以上にきめ細かな情報収集に努めていただきたい。次号1・2月号では、2017年度入試ファイナル情報をお届けする。こちらもぜひご活用いただきたい。

【図表7】 私立大 学部系統別志望動向（第3回全統マーク模試より）

